

『頭のうちどころが
悪かった熊の話』

或る書評職人の眼

波那

「人生について考える7つの動物寓話」と銘打たれていたこともあって、童話には異例の大ヒットだった当時^{*}にはどこか気恥ずかしさを感じていた1冊、それが『頭のうちどころが悪かった熊の話』（安東みきえ／著、下和田サチヨ／画）でした。書き下ろし2篇を含めた7つの物語は、時折ありがちな寓話の体裁を借りた教訓譚とは異なって、淡々とおかしみを交えて語られる良質な短篇集です。旅人と動物たちがゆるくつながりながら織り成す物語は、子どもでも分かりやすいやさしい言葉と意表をついたラスト、飽きの来ない長さで構成されています。そこだけ語ってもおもしろおかしい物語として完結しますし、建前と本音のズレに敏感な子どもの感性を代弁するようなどころも多いので、親近感も一層わくかも知れません。

一方で子ども時代を通り過ぎてしばらく経つような大人の私たち読者には、別の愉しみも用意されています。きれいな事や理想と次第にずれてくる現実を十分に知っている私たちだからこそ、成長や自立を前にした親子の情や友情、生きる意味の探究、その意味探究の意味まで疑うこと——これらが語られる諷刺的な目線と、行間に流れる温かさをふとした表現から感じ取れるはず。誌面の都合でとりわけ印象的だった4篇についてご紹介します。

表題作「頭のうちどころが悪かった熊の話」。唯一覚えていた「レディベア」が「黒くて毛深くて、あたたかく、四つ足」と分かっているまでの道中にイライラするか癒やされるかはともかく、冒頭の謎が一気に解けるラストのどんでん返しは鮮やか。イチオシは最初に熊が出逢った亀とクマバチとの対話です。ゆるやかに生きていく亀とのタイムラグ、喜びも悲しみも1日遅れで届くという細やかな設定と、交わされる言葉やしぐさの情感の描写がいいですね。

第4話は「ないものねだりのカラス」。木々の隙間のかたち恋をするカラス

の涙ぐましくも必死な行動が笑えます。わが身の欠点がちつとも見えていないまま理想に焦がれてやまない彼のことを「アホー」と一緒に笑いつつ、いつのまにか傍観者だったつもりで身につまされてしまう。カラスくん懲りないなあどぬるく見守りつつ、アイタタと内心思いつつ、それでもどこか許されているように思える温かさがあります。

第5話「池の中の王様」は第3話「ヘビの恩返し」に通じるテーマがあります。親子の対話と自立、そして後半は友情。誕生直後から「なぜ？」と問わずにいられないおたまじゃくし「ハテ」とヤゴの物語。

「自分の目でしか見えないんだよ。なにがホントかなんて、だれにもわかりっこないじゃないか。でもわかっていているのは、ぼくの世界ではぼくが王様ってこと。ほら、その証拠に……」ハテは目をぎゅっつつむった。「ぼくが目をつむりさえすれば、世界はなくなる」(p88)

この自意識たつぷりのセリフの気恥ずかしき！彼がどうやって成長していくか、そこは本作でぜひご注目。かつてどこかで通ってきたしよっぱい想い出が彷彿としますが後半はぐいぐいと読ませます。対立しそうな立場の違いを越えた友情というのは、ある意味永遠のテーマかもしれません。彼らの成長と変化が清々しい1篇です。

最後に今回書きおろされたひとつ、第6話の「りっぱな牡鹿」。森の知恵者として頼られる相談役です。森の皆の関心事は各々の「生きる意味」。深いですね。深いけれども、本人が深刻そうにみえるほど端からみればどこか滑稽、まるで漫才です。この視点のズレとやりとりのばかばかしさに既視感を覚えつつ、つつこみを入れながら読むのが正解でしょう。ラストのホーイチさんのしでかしたあることとそのオチはお見事。

こんな按配に、ときに大真面目に悩む姿を見せつつそれを外からの目線を入れながら温かくもおかしみを混ぜて差し出される7篇。笑ったあと中身がけっこう

深いところを突いてくることに気づきます。それをさらにまぜっかえしひっくりかえしてみせる技が見事なだけに、大人だったら斜に構えがちなテーマも面白おかしく楽しめるのだと感じました。

* 発売から4カ月で7刷7万2000部 (asahi.com BOOK 2007.7.14付記事による。)

<http://bookasahi.com/clip/TKY200707140372.html>

本を読むだけでなく、
読んであげるだけでもなく
何か、もっと先へ。
そう思って始めました。
食事と同じく、
読書は私たちの栄養に
なってゆくもの。
私の評は、その美味しさの
一滴をお伝えするために
在ります

波那 (はな)

静岡県在住。夫十子ども2人の4人暮らし。

ネット書評家・五行歌人

2008年オンライン書店ビーケーワンに
wildflower名義で書評を書き始める。

2009年5月9日「書評の鉄人」

2009年10月16日「書評の鉄人列伝195回」

<http://www.bk1.jp/contents/shohyou/retuden195>

2010年3月9日通算書評数200本達成。

隔月刊誌『グランパピエ』に書評の連載中